

I 次の文章を読んで、後の問い(問1～14)に答えよ。(配点 75)

甲

この宇宙に、人類と同じような知性を持った宇宙人がどれくらい存在し、彼らと遭遇することは可能か、という問題がよく議論になる。

これは、UFO (Unidentified Flying Object 未確認飛行物体) など、宇宙人が地球にやって来ているという主張に対する疑義にも関係しているが、この問題のもっとも重要な要素は、人類のような発達した I そのもの II である。人類(あるいは宇宙人)はどれくらい文明を III させて絶滅するのか? と言ってもよい。

地球上には現在、記載されている生物種は約300万種、記載されていない種はその10倍以上存在すると考えられている。しかし、過去6億年の生物進化の歴史をたどると、種の99・9%まで絶滅したことがわかっている。特に、過去に5回の大絶滅があり、種の50%以上絶滅した時期があった。

いずれにしろ、種は絶滅するというのが自然界の鉄則のようで、A 人類も例外ではないと考えるのが当然だろう。では、人類は何が原因で絶滅することになるのだろうか?

自然大変動による絶滅

約6500万年前に恐竜が絶滅した(同時に海陸双方の生物の50%以上も絶滅したことが知られている)「白亜紀末の大絶滅」は、巨大隕石が地球に衝突したことが原因であることはほぼ確かなようである。

隕石衝突によって巨大なクレーターが作られ、そこで巻き上げられた塵が地球を覆い尽くして温度が下がり、巨大な津波が励起されて地上を舐め尽くし、山火事でダイオキシンが発生して海に流れ込み——という X によって、恐竜を含む生物の大半が絶滅したとされている。

発見されているクレーターの大きさから、直径10キロメートルもの巨大隕石が地球にぶち当たったとされるのだが、はたしてこんなことがヒンパンに起こり得るのだろうか?

実は、約2億年前に起こった「三畳紀の大絶滅」も、隕石衝突のためではないかと推測されており、約1億年に1回はこのような事件が勃発しているのかもしれない。とすると、前回は6500万年前だから、このような事件で人類が絶滅する可能性は低いのではないかと(注五)。

いっぽう、約2億4500万年前の二畳紀末に起きた大量絶滅では、なんと生物種の90%まで絶滅したようだが、火山爆発が連動して起こり、地球が高温化したとともに酸素不足になったためではないかという推測がある。何が火山爆発の引き金を引いたのかわからないが、プレート運動で地殻が大きく変形され、その結果、マグマの噴出が加速されたのかもしれない。

このような地球の大変動は、億年の単位で起こっており、当面は考えなくてよいように思える。

遺伝子の劣化による絶滅

絶滅している種を調べてみると、いずれも種として確立してからほぼ400万年は経っており、遺伝的能力の悪化がルイセキしたため自然淘汰されたのではないかとされている。つまり、種は

100年というスケールでなくなってしまう可能性が大きい。そのような事態を目の前にして、あらかじめ資源を確保しておこうと武力によって世界セイハを狙う国が現われるかもしれない。むしろ、他の国も座して滅びたくないから対抗するようになり、それが世界の騒乱を招くのではないだろうか。それによって核戦争になる危険性もあり、たとえ勝ち残っても放射能に汚染された地球、そして地下資源が枯渇してしまった地球しか残されず、人類は絶滅の道をたどることになりかねない。

以上のような、人類がバカであるために滅ぶのはそう遠いことではない。このまま人類の知的レベルが変わらないとすれば、数百年先には必ず絶滅の時を迎えるのではないだろうか。

私は、地下資源文明から地上資源文明に切り換え、欲望を抑制し、自己を確立し、地産地消に徹し、過剰な科学・技術に毒されない、そんな生き方を100年以内に発見すれば、人類の滅びは、

イ

、と思っている。

池内 了「科学は、どこまで進化しているか」(祥伝社 2015年)

(注一) 白亜紀：地質年代の一つ。約一億四〇〇〇万年前から六五〇〇万年前までの期間。

(注二) 励起：原子や分子が外からエネルギーを与えられて、もとのエネルギーの低い状態から高い状態へ遷移すること。本来の字義は、激しく引き起こされること。

(注三) ダイオキシン：有機塩素化合物の一種で、多くの異性体の総称。毒性があり、ゴミ焼却などでも発生する環境汚染物質。

(注四) 三畳紀：地質年代の一つ。約二億五〇〇〇万年前から二億年前までの期間。

(注五) 二畳紀：地質年代の一つ。約二億九〇〇〇万年前から二億五〇〇〇万年前までの期間。

(注六) プレート：地殻と地殻の下の上部マントルからなる一〇〇キロメートルほどの厚さの岩盤。地震活動・火山噴火・造山運動などの現象を理解するための基本概念。

(注七) 利己的遺伝子：生物進化や自然淘汰を遺伝子中心に捉える用語。個体の生存や繁殖の行動を遺伝子が支配するという視点から説明することを基本とする。

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1 傍線部 a ～ g のカタカナを漢字に直せ。解答は、解答题紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は ～ 。

- | | | |
|---|-------|--------------------------------|
| a | ヒンパン | <input type="text" value="1"/> |
| b | ルイセキ | <input type="text" value="2"/> |
| c | シユウ | <input type="text" value="3"/> |
| d | ハイキ | <input type="text" value="4"/> |
| e | キガ | <input type="text" value="5"/> |
| f | ヒンキユウ | <input type="text" value="6"/> |
| g | セイハ | <input type="text" value="7"/> |

問2 空欄 ～ に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- | | | | |
|---|--------|---------|----------|
| ① | I 知性 | II 進化 | III 遭遇 |
| ② | I 存在 | II 歴史 | III 疑義 |
| ③ | I 文明 | II 関係 | III 主張 |
| ④ | I 知性 | II 確認 | III 存在 |
| ⑤ | I 存在 | II 問題 | III 発達 |
| ⑥ | I 文明 | II 寿命 | III 持続 |

問3 空欄 に入る語として最も適当なものを、次の①～⑨のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- | | | | | | |
|---|------|---|------------------------|---|---------------------------|
| ① | 頂天立地 | ② | 天長地久 | ③ | 天地開闢 <small>かいびやく</small> |
| ④ | 驚天動地 | ⑤ | 天神地祇 <small>ちぎ</small> | ⑥ | 天地無用 |
| ⑦ | 歎天喜地 | ⑧ | 天変地異 | ⑨ | 天地創造 |

問4 空欄 Y に入る語として最も適当なものを、次の①～⑨のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

- | | | |
|-------|-------|-------|
| ① 安定化 | ② 肥大化 | ③ 抽象化 |
| ④ 液状化 | ⑤ 規格化 | ⑥ 弱体化 |
| ⑦ 一元化 | ⑧ 恒常化 | ⑨ 活性化 |

問5 空欄 Z に入る語として最も適当なものを、次の①～⑨のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

- | | | |
|------|------|------|
| ① 推測 | ② 確立 | ③ 心配 |
| ④ 否定 | ⑤ 抑制 | ⑥ 継続 |
| ⑦ 淘汰 | ⑧ 加速 | ⑨ 銘記 |

問6 空欄 ア に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

- ① さまざまな変異が増加していくために
- ② さまざまな変異が減少していくために
- ③ さまざまな変異が排除されていくために
- ④ さまざまな変異が増加していくにもかかわらず
- ⑤ さまざまな変異が減少していくにもかかわらず
- ⑥ さまざまな変異が排除されていくにもかかわらず

問7 空欄 イ に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① 核戦争まではもつのではないか
- ② 種の絶滅まではもつのではないか
- ③ 隕石衝突まではもつのではないか
- ④ 地球の大変動まではもつのではないか
- ⑤ 遺伝子の悪化まではもつのではないか
- ⑥ 宇宙人との遭遇まではもつのではないか
- ⑦ 地下資源の枯渇まではもつのではないか
- ⑧ 環境悪化が人類を追い詰めるまではもつのではないか

問8 傍線部A「人類も例外ではない」とは、どのようなことに対して例外ではないのか。最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 種は絶滅すること
- ② 自然界の鉄則を当然視すること
- ③ 宇宙人との遭遇は可能であるということ
- ④ 人類は何が原因で絶滅するのかと問うこと
- ⑤ 生物進化に6億年の歴史があるということ
- ⑥ UFOなどが地球に飛来しているということ

問9 傍線部B「当面は考えなくてよいように思える」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 大絶滅の中を生き抜く種が必ずあるから。
- ② 自然大変動は億年の単位で起こっているから。
- ③ 白亜紀末の大絶滅は巨大隕石の地球衝突が原因と考えられるから。
- ④ 三畳紀の大絶滅も隕石衝突のためではないかと推測されているから。
- ⑤ 二畳紀末の大絶滅では何が火山爆発の引き金を引いたのかわからないから。
- ⑥ 隕石衝突が約1億年に1回起こるとすると前回の大絶滅は6500万年前だから。

問10 傍線部C「そう遠い時期ではないと考えられる」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 自然に生きる生物に比べて20倍も速く遺伝子劣化が進んでいるなら、人類の遺伝子は淘汰される時期を迎えると考えられるから。
- ② 自然に生きる生物に比べて20倍も速く遺伝子劣化が進んでいるなら、猿人の直系の子孫である人類の遺伝子は十分劣化しているから。
- ③ 自然に生きる生物に比べて20倍も速く遺伝子劣化が進んでいるとしても、DNAはずっと永続して祖先から受け渡されてゆくから。
- ④ 自然に生きる生物に比べて20倍も速く遺伝子劣化が進んでいるとしても、リチャード・ドーキンスの「利己的遺伝子」は事実と考えられるから。
- ⑤ 自然に生きる生物に比べて20倍も速く遺伝子劣化が進んでいるのは仮説であり、人類の遺伝子の劣化は心配しなくてもよいから。
- ⑥ 自然に生きる生物に比べて20倍も速く遺伝子劣化が進んでいるというのは仮説であり、ホモ・サピエンスの子孫である人類の遺伝子はまだ若い段階にあるから。

問11 傍線部D「数百年先には必ず絶滅の時を迎えるのではないだろうか」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

- ① 冷戦が終了して核戦争の危機は去ったかに見えるが、まだ世界中には1万5000発もの核兵器が存在し、いつ何時ミサイルが飛び交うかもしれないから。
- ② 温室効果ガスの過剰な放出で地球温暖化が進み、地球の気象変化が狂うようになり、干ばつや大雨によって作物の不作が続き、食物が不足する可能性があるから。
- ③ 原発事故だけでなくテロによってミサイルが原発に撃ち込まれて放射能まみれになる危険性が否定できないから。
- ④ エボラのような殺人ウイルスが耐性を獲得して蔓延すれば、手の施しようがないかもしれないから。
- ⑤ 環境悪化が引き金となって、次々と人類を追い詰める事態が引き起こされ、絶滅に向かうことも十分考えられるから。
- ⑥ 地下資源が今後100年というスケールで枯渇するなか、資源確保のため武力を行使する国と対抗する国が核戦争を起こす危険性があるから。

問12 空欄 甲 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は 18。

- ① 大絶滅
- ② 知性の存在
- ③ 文明の持続
- ④ 人類の滅亡
- ⑤ 宇宙人との遭遇
- ⑥ 生物種の多様性
- ⑦ 生物進化の歴史
- ⑧ 自然界の鉄則と例外

問13

本文の内容に合致するものを、次の①～⑨のうちから二つ、選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

19

20

- ① 地下資源の確保をめぐる武力衝突が核戦争に発展すれば、放射能に汚染された地球しか勝者には残されないうえに、地下資源も枯渇してしまい、人類は数百年先には必ず絶滅の時を迎えるのではないかと危惧される。
- ② ホモ・サピエンスから考えると、人類の遺伝子はまだ若い段階にあるが、近代以降、化学物質、放射能、耐性ウイルス、耐性菌などの影響を受けて、遺伝子の劣化は進んでいると判断すべきであり、大量絶滅まであまり時間はないかもしれない。
- ③ 二畳紀末の大量絶滅では、隕石衝突に火山活動が連動して起こり、地球が高温化するとともに酸素不足になり、さらにプレート運動で地殻が大きく変形され、その結果、マグマの噴出が加速された可能性も考えられる。
- ④ 地球上には現在、記載されている生物種は約300万種、記載されていない種はその10倍以上存在するとみられるが、過去6億年の生物進化の歴史をたどると、種の99・9%まで絶滅したことがわかっており、これにより種は絶滅するという自然界の鉄則ができた。
- ⑤ 遺伝子の寿命を500万年と仮定すると、猿人の登場はほぼ600万年前とされるが、猿人の直接の祖先であるホモ・サピエンスの登場はほぼ20万年前とされるので、人類の遺伝子の劣化は心配しなくてよいことになる。
- ⑥ 分裂によって増える生物は別として、両性具有の生物個体は必然的に死を迎えるが、DNAは死ぬことなく代々受け継がれ、その間、遺伝子の劣化を伴いながら、ついに生存を継続することができなくなつて絶滅すると考えられる。
- ⑦ 白亜紀末の大絶滅では、直径10キロメートルもの巨大隕石が地球に衝突したため、巻き上げられた塵が巨大クレーターを作り、気温を低下させ、巨大津波や山火事が発生して、恐竜を含む生物の大半が絶滅したと考えられている。
- ⑧ 欲張りで、向こう見ずで、先行きのことを考えずに自分の利得だけを考える生き方から、欲望を制御し、自己を確立し、地産地消に徹し、過剰な科学・技術に毒されない、そんな生き方に100年以内に転換すれば、人類は滅亡を回避することができるだろう。
- ⑨ 人類がバカであるために絶滅してしまう危険性のうち最たるものは、核戦争による絶滅であって、冷戦終了後も核戦争の危機は去っておらず、核兵器を完全に捨て去るまではその危機は去らないことを、深く心に刻みつけておくべきだろう。

問14 本文の表題として最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は 21。

- ① 人類滅亡とは何か？
- ② 人類滅亡の可能性は？
- ③ 人類滅亡までの時間は？
- ④ 人類滅亡の危険性とは何か？
- ⑤ 人類が滅ぶことは、必然か？
- ⑥ 人類が滅ぶとしたら、何が原因か？
- ⑦ 人類が滅ぶことから、回避は可能か？
- ⑧ 人類が滅ぶのは、知的レベルが低いからか？

II

次の文章を読んで、後の問い(問1～14)に答えよ。(配点 75)

「リベラル」と「奴隸的」

「大学の理念」という書名の本は、これまで何度か出されている。その最も古いバージョンは、一八五二年、ジョン・ヘンリー・ニューマンがアイルランドのダブリンでカトリックの新しい大学を創立しようとしていたときに行った講演をまとめた著書であろう。大学論の古典とされるこの本でニューマンは、大学が教える知識の根本が、何らかの目的のために役に立つ手段的な知ではなく、それ自体として価値のある「自己目的としての知」リベラル(自由)な知にあることを強調した。

この場合、「リベラルな」という語は、「奴隸的な(サーヴァイル)」の反対語として使われている。ニューマンは、「奴隸的」とは「精神がほとんど、あるいは全くといっていいほど関与」しない状態であり、「リベラルな」とは「精神、理性、^aナイセイの働き」が生む状態なのだとする。この対照は、「肉体的」と「精神的」という I に必ずしも対応しない。つまり、肉体の働きのにもリベラルなものがあり、精神の働きにもそうでないものがある。前者の例として、彼は開業医や(古代の)オリンピック選手に触れ、後者の例として職業的な専門家に触れる。つまり、知性が「職業的でしかないものは、いかに高度に知性的であつても、……簡単にリベラルと呼ぶことはできない」。そうではなく、「それ自体の要求に基づき、結果に左右されず、補足を一切期待せず、いかなる目的によつても(いわば)鼓吹されず、技術に吸収されるのを拒む」知性こそがリベラルなのである(『大学で何を学ぶか』大修館書店、一九八三年、一七頁^{ページ})。

大学は、このような意味での「リベラルな」知性を育む場所であるというのが、^Aニューマンの主張であった。だから、大学の使命は、「学識」とか「知識の習得」ではなく、むしろ「知識」に基づいて働く『思想』ないしは『理性』、言い換えれば、『哲学』と呼ばれ得るものを身に付けさせることにある。彼はさらに、「寄宿舎も個別指導教官の監督もなく、広範囲にわたる学科試験に合格したものはすべて学位を授与するようないわゆる『大学』と、オックスフォード大学が過去六〇年もの間そうであつたように、教授もいなければ試験も全くなき、ただ多くの学生たちを三、四年集めておいて、やがて送り出すような『大学』、この二つの方法のうちどちらが知性の訓練により適しているかと問われ」たら、後者の「何もしない『大学』を選ぶことに何のためらいも感じません」とまで言い切っていた(同書、七四頁)。

いうまでもなく、現代日本の大学の大半は前者である。後者のような「大学」を、文部科学省も様々なメディアも大学の理想型とは評価しないだろう。しかし、ニューマンの大学理念からすれば、現代日本ならば高く評価されるかもしれない前者の^bカンペキな大学よりも、後者のような大学のほうがはるかに望ましいのだ。なぜならば、後者の大学こそが「リベラルな知」の場として息づくのであり、^B前者の大学は、そこで学ばれる知をいささか「奴隸的な」ものに手段化してしまっているのである。

ニューマンはさらに、こうして大学で教えられる「リベラルな知」は、個々の学問分野がその一部であるような「一つの統一体」でなければならぬと考えていた。実際、大学には「専門の学問に熱意を燃やす、ライバル同士の学者たちが、親密な交わりによって、また知的平和を求めて、各自の研究主題の主張と関係を調整するように招き寄せられている」。このような、異なる専門や立

場をあえて学内で徹底的に共存させることにより、学生たちは「知識の大いなる輪郭を、知識の基本原則を、知識の各部門の規模を、その光と影を、その重要な個所かしよとそうでない個所とを理解するのですが、こうしたものは別の方法では理解できないものなのです。学生の教育が『リベラル』と呼ばれる理由はここにあります」（同書、七頁）。つまり、時には拮抗きっこうし、時には分散する専門知を全体として理解する力、「多くの事柄を同時に一つの統一体として眺める力、それらの事柄を普遍的体系の中でそれぞれ然るべき場所に位置づける力、それぞれの価値を理解し、相互の依存関係を決定する力、そのような力こそが精神の真の拡大」（同書、六一頁）なのであり、大学の使命は、このような精神の拡大を学生たちにもたらしことにあるのである。

甲

ニューマンが大学は「リベラルな知」の場であることを強調した背景は、同時代の英国で勢力を伸ばしていた功利主義的大学観に対する反発があった。功利主義は、経済や政治の分野での「自由主義」と結びついており、そうした立場からの大学批判の先鞭せんべんは、一九世紀初頭に『エジンバラ・レビュー』のオックスフォード大学批判によってつけられた。彼らが批判したのは、同大学の教育の根幹をなしていた古典教育で、ギリシャ語やラテン語から出発して古典を読むというスタイルは、大学の根幹が知的洗練よりも財務基盤の確からしさに置かれる時代にはもう通用しないとされた。オックスフォード大学は、科学の発展やヨーロッパ大陸での哲学や文学の動向に鈍感で、その教育は学生の同調性や **II**、偏狭主義を助長し、異質な他者と出会い、知的に非協調を貫く力を弱めている。そうしたイングランドの名門に対し、スコットランドの大学は、より開放的で、多様で、民主的で、現代に役に立つ知を目指しており、オックスフォードが重視する教養教育よりも、むしろ研究と職業教育に力点を置いている。

これはまるで二一世紀初頭の現在の大学批判のようだが、こうした論議が英国でなされていたのは、今から二〇〇年前、一九世紀初頭のことである。ちなみに一九世紀の英国において、古典重視のイングランドの大学、オックスフォードやケンブリッジに対し、より実用重視のスコットランドの大学、エジンバラやグラスゴウの対照は明瞭で、だからこそ明治政府のエリートたちは、そのグラスゴウ大学の実用重視の教育体制を明治日本に導入し、近代日本の工学教育の根幹を形作っていったのである。

他方、同じイングランドの中においても、オックスフォードやケンブリッジのような中世からの名門私学と、ジェレミー・ベンサムの功利主義と大学大衆化の思想を背景に一八三六年に設立されやがてチャールズ・ダーウィンの進化論を生んでいくロンドン大学の大学理念は著しく対立していた。ニューマンが擁護したのは、あくまで選ばれた紳士子弟の間での「自由の知」であったが、ロンドン大学が標榜ひょうぼうしたのは、ジェンダー、階級、宗教の差なく有能な若者を受け入れ、有用な教育を施していくことだった。

当時、ロンドン大学は、職業教育を含む多様な開講科目やチュータリングよりも講義を中心とした授業、全寮制にこだわらない学生生活、試験による学位認定、学生自治会の活動など、今では私たちがアメリカ型大学のスタイルと考えているものの多くを実験していた。ニューマンは、このような新しい大学のありかたに厳しい視線を向けていたわけだが、しかし後者のモデルは、その後の

アメリカの州立大学などにも広がっていったと同時に、イギリスではオーブン・ユニバーシティにつながるケイフともなっていく。つまりここにも、日本で言えば旧制高校的な教養教育の理念と、戦後に南原繁らが目指した一般教養教育や、その後の労働者教育や市民大学につながる理念との対立によく似た対立がすでにあったわけだ。

さらに言えば、ニューマンが擁護したのは、あくまで中世キリスト教世界の中での教師と学生の協同組合としての大学の「自由の知」であって、同時代にベルリン大学を中心に勃興していたフンボルト型の大学の「自由の知」でもなかったことにも注意しておこう。後者が提起したのは、「研究する学生」という新しい学生像である。西欧では、大学Ⅱユニバーシティはそもそも理念的に教師と学生の共同体だったが、フンボルト以前には、その学生は「学ぶ者」ではあっても「研究する者」ではなかった。フンボルトはこの学生の役割を転換したのであり、それはたしかに大学史における革命的な価値転換であった。しかし同時に、ここで危機に瀕するのが、リベラルアーツ的な^Eの全体性である。そして、このリベラルアーツの全体性へのこだわりから、アメリカの大学は、学部教育はカレッジとしてなされるべきことを最後まで捨てず、フンボルト的革新をむしろグラデュエイトスクールにおいて徹底させたのである。

乙

ニューマンはもともとオックスフォード大学のエリート学生であり、若くして同大学オリエル・カレッジのフェローに選ばれて神学を教える教授となった。二〇代の頃から英国国教会の司祭としても活躍しており、一八三〇年代から同大学を拠点に展開したオックスフォード運動、すなわち国教会に対するイギリス国家の干渉と自由主義の浸透に反対する運動の思想的リーダーとなった。やがて四〇年代、彼はこの考え方を徹底させていった先で、ついに国教会からカトリックに改宗してしまう。当然、この改宗は、ニューマンの人生に大きな結果をもたらすことになる。この時代のイギリスには、まだ宗教改革以来の反カトリック的な空気が残っており、それが産業革命でリュウセイに向かうナショナリズムと一体をなしていた。ニューマンが公式に改宗を選択したことは、そのような国民世論と、「保守」の立場から鋭く対峙することを意味する。彼はオックスフォード大の教授職を辞し、カトリックの司祭となる。アイルランドにカトリック大学を創設するというのはその半ば必然的な帰結であった。ところがニューマンは、その新設大学の初代学長となるも、後ろ盾となるはずだった枢機卿との対立から数年で学長辞任に追い込まれている。国家の支配から離れたつもりが、他方には教会の支配があり、そのどちらの支配からも独立することを標榜した彼の「大学の理念」は、

ア

しかし、数百年のスパンで眺め返すなら、ニューマンの「大学の理念」は、同時代のイン格蘭ドのナショナリズムやスコットランドからの功利主義のシンコウはもとより、一九世紀を通じてドイツから全世界に広がったフンボルト型の「第二世代の大学」の理念をも超えて、「大学Ⅱユニバーシティ」の根幹にある急所の問いを衝いていた。そもそも彼の大学概念は、オックスフォード大学の風土の中から生まれたものであったが、そのオックスフォードが同時代に囚われていた地平を超える展望を示してもいたのである。それは要するに、「リベラルな知」を理念の核とする大学は、産業革命がもたらした諸々の価値転換、有用性や効率性の規準を超える知的展望をもたらすも

のでなければならぬということだ。

この産業革命以降の有用性重視の思想と対峙し、貴族的高潔さととどまる覚悟において、ニューマンの大学論は、同時代にやはりオックスフォード大学が生んでいたマシュー・アーノルドの文化論と似ていたようにも思える。アーノルドのほうがニューマンよりも一代若く、彼は学生時代にニューマンの講義に出席していた。^(注八)カルチュラル・スタディーズの端緒について何度か解説したように、アーノルドが一八六九年に出版した『教養と無秩序』は、やがてレイモンド・ウィリアムズのある。同じように、産業革命の進行に伴う英国社会の効用主義と鋭く対峙し、なお「リベラルな知」の場としての大学の価値を説いたニューマンの大学論を、未来の大学論が乗り越えるべき古典として位置づけておくことができるであろう。

吉見 俊哉「大学という理念」(東京大学出版会 2020年)

(注一) チュータリング：学習に関する個人指導。

(注二) オープン・ユニバーシティ：多数の人間・地域に開かれた通信制を中心とする総合大学。

(注三) フンボルト：ドイツの言語学者、政治家であり、ベルリン大学を創設。

(注四) リベラルアーツ：人間が身に付けるべき基礎的な学問である文法、論理、修辭、算術、幾何、天文、音楽から成る七科。

(注五) カレッジ：中等教育後の学部教育を行う教育機関。

(注六) グラデュエイトスクール：学士号取得者が進む教育機関。

(注七) フェロー：教授や講師を兼ねることが多い大学の特別研究員。

(注八) カルチュラル・スタディーズ：文化一般について様々な観点から領域横断的に行う研究。

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1 傍線部 a ～ e のカタカナを漢字に直せ。解答は、解答用紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は ～ 。

a ナイセイ

b カンペキ

c ケイフ

d リユウセイ

e シンコウ

問2

空欄

・

に 入 る 語 と し て 最 も 適 当 な も の を 、 次 の ① ～ ⑨ の う ち か
ら 各 々 一 つ 選 べ 。 空 欄 I の 解 答 番 号 は 、 空 欄 II の 解 答 番 号 は 。

① 視野狭窄きょうさく

② 非差別性

③ 現実主義

④ 同義反復

⑤ 非均質性

⑥ 温情主義

⑦ 均衡概念

⑧ 平衡感覚

⑨ 二項対立

問3

空欄

に 入 る も の と し て 最 も 適 当 な も の を 、 次 の ① ～ ⑥ の う ち か

一 つ 選 べ 。 解 答 番 号 は 。

- ① その後スコットランドで実現することになる
- ② フンボルト型大学に活路を見出すことみいだになる
- ③ 結局オックスフォードに回帰することになる
- ④ 現実的な基盤を見つけれなかったのである
- ⑤ 産業革命の進行により犠牲になったのである
- ⑥ 改宗したことで実現することになるのである

問4 傍線部A「ニューマンの主張」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 30。

- ① 大学の使命は開業医や古代のオリンピック選手のような高度な知性を備えた職業的専門家を育成することである。
- ② 大学とは精神の働きを抑え、技術へと吸収されることを拒む「リベラルな」知性を育む場所である。
- ③ 大学の目的は職業的な専門家を育てることにあるのではなく、それ自体として価値のある「自己目的としての知」を得ることにある。
- ④ 大学は、広範囲にわたる学科試験に合格させることを通じて学生に「リベラルな知」を習得させる場でないといけない。
- ⑤ 大学の使命は「学識」や「知識の習得」にあるのではなく、知性を訓練することにより哲学者を輩出することにある。
- ⑥ 大学が教える知識の根本は「リベラルな知」にあり、それは精神が全く関与しなくともそれ自体として価値を持つものである。

問5 傍線部B「前者の大学は、そこで学ばれる知をいささか『奴隸的な』ものに手段化してしまっている」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 31。

- ① 現代日本の大学では、それ自体として価値のある「リベラルな知」を教えるはならず、実用的な知識を教えることに偏重している。
- ② 寄宿舎も個別指導教官の監督もない大学では、精神がほとんど関与しないままに学科試験を課すことなく職業的な知識の提供が行われている。
- ③ オックスフォード大学では、高度に知性的であつても簡単にリベラルと呼ぶことはできない知性の訓練が行われている。
- ④ 「リベラルな知」の場として息づいていない大学では、それ自体として価値のある自己目的としての知が教えられている。
- ⑤ 大学の理想型として文部科学省から評価される大学は、実用的な観点から有用とされる知識の教育に特化している。
- ⑥ 広範囲にわたる学科試験に合格すれば誰にでも学位を与えてしまうようないわゆる「大学」は、何かの目的に役立たせるようなものとして知を教えている。

問6 傍線部C「こうした論議」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 32。

- ① ギリシャ語やラテン語を学び古典をしつかりと読むような教養教育を大学では重視するべきなのか、それとも現代に役立つ職業教育を研究以上に重視するべきなのかという論議。
- ② 「自由主義」と結びついた功利主義の立場から知的洗練を重視する大学教育を行うべきなのか、それとも開放的で現代に役立つ知を目指す大学教育を行うべきなのかという論議。
- ③ 古典重視のイングランドの大学に子どもを進学させるほうが良いのか、それとも実用重視のスコットランドの大学に子どもを進学させるほうが良いのかという論議。
- ④ 大学ではギリシャ語やラテン語で書かれた古典を読み込むような教養教育を重視するべきなのか、それとも科学の発展や職業に役立つ実用的な教育を重視するべきなのかという論議。
- ⑤ 将来の仕事に役立つような教育を受けるには、教養教育重視の大学で学ぶほうが良いのか、それとも職業教育重視の大学で学ぶほうが良いのかという論議。
- ⑥ 大学教育は科学の発展やヨーロッパ大陸での哲学や文学の動向に敏感なものであるべきなのか、それとも多様で、民主的で、現代に役立つ知に敏感であるべきなのかという論議。

問7 傍線部D「大学理念は著しく対立していた」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- ① 大学教育の中でベンサム功利主義を重視する考え方とダーウインの進化論を重視する考え方とが大きく対立していた。
- ② 知性面で優れた大衆に教養教育を施すべきだというニューマンの考え方と有能な若者に職業教育を含む多様な教育を施すべきだというロンドン大学の考え方とが強く対立していた。
- ③ 大学教育は中世からの伝統ある名門私学で行うべきだという考え方と開かれた新しい公立大学こそ教育にふさわしい場であるという考え方とが激しく対立していた。
- ④ 寄宿舎で指導教官による監督の下、知識の習得のみを励行すべきだという考え方と全寮制にこだわらず有用な教育を施すことが重要であるという考え方とが全面的に対立していた。
- ⑤ 大学は選ばれた紳士子弟に古典重視の教育を行うべきだという考え方と宗教や階級に関係なく有能な若者に実用重視の教育を行うべきだという考え方とが大きく対立していた。
- ⑥ 大学ではオックスフォード大学のように教養教育を重視すべきであるという考え方とグラスゴー大学のように実用教育を重視すべきであるという考え方とが強く対立していた。

問8 傍線部E「知の全体性」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

解答番号は 34。

- ① 精神からの解放を図るべく個々の自由な知が集合し全体化されているということ
- ② 教師と学生が協同することにより個々の知が全体の知として拡大するということ
- ③ 個々の学問分野の知が相互に関連し統一体としての知を形成しているということ
- ④ 実用教育に有用な複数の知が現代に役立つ知として集大成されているということ
- ⑤ 何らかの目的に有用な複数の知が互いに依存しながら知の世界を創るということ
- ⑥ 個としての専門知が普遍化していくことにより全体知に転換していくということ

問9 傍線部F「フンボルト的革新」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一

つ選べ。解答番号は 35。

- ① フンボルトが、功利的に教師と学生の共同体であった大学の役割を、革命的に価値転換させてしまったということ。
- ② フンボルトが大学における学生の学びを禁じ、学生は「研究する者」に転換すべきだと主張したということ。
- ③ フンボルトが中世キリスト教世界における教師と学生の協同組合としての大学運営を否定し、教師と学生の共同体としての大学運営を提起したということ。
- ④ フンボルトが提起した新しい学生像によって大学では教師による研究よりも学生による研究が前面に出るようになったということ。
- ⑤ フンボルトがそれまで単に「学ぶ者」であった学生について「研究する者」としての新たな役割を提起したということ。
- ⑥ フンボルトが「研究する学生」という新しい学生像を示したことにより大学は革命的な価値転換を常に追求することになったということ。

問10 傍線部G「この改宗は、ニューマンの人生に大きな結果をもたらすことになる」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 36。

- ① 国教会からカトリックに改宗したため、ニューマンはオックスフォード大の教授職を追われることとなり、やむなくカトリックの司祭となってアイルランドにカトリック大学を新設したが、その初代学長の職からも数年で追われることになる。
- ② 国教会からカトリックに改宗したニューマンは、オックスフォード大の教授職を辞めた後に、カトリックの司祭となり、自らアイルランドに創設したカトリック大学の初代学長に就いたが、国教会枢機卿と対立し、数年で学長辞任に追い込まれることになる。
- ③ 国教会からカトリックに改宗し、国民世論と「保守」の立場に対峙することになったニューマンは、オックスフォード大の教授職を辞し、カトリックの司祭を経てアイルランドにカトリック大学を創設したが、その初代学長の座を数年で追われることになる。
- ④ 国教会からカトリックに改宗し国民世論と対峙することになったニューマンは、アイルランドにカトリック大学を創設し、その初代学長に就くことよって教会の支配から独立したが、枢機卿との対立から数年で学長辞任に追い込まれることになる。
- ⑤ 国教会からカトリックに改宗したことによりオックスフォード大の教授職を辞したニューマンは、アイルランドにカトリック大学を創設して初代学長に就いたが、国家の支配からの独立を標榜したことにより枢機卿と対立し、数年で学長辞任に追い込まれることになる。
- ⑥ 国教会からカトリックに改宗したニューマンはオックスフォード大の教授を辞め、カトリックの司祭となった後、アイルランドにカトリック大学を新設してその初代学長に就いたが、枢機卿との対立により数年で学長を辞任することになる。

問11 傍線部H「英国社会の効用主義」にあてはまらないものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 37。

- ① 有用性や効率性の規準の重視
- ② フンボルト型の大学の「自由の知」
- ③ 大学では現代に役立つ知を目指さねばならないという考え方
- ④ 実用重視の教育体制
- ⑤ 職業教育に特化した多様な開講科目
- ⑥ 『エンジンバラ・レビュー』のオックスフォード大学批判

問12 空欄

甲

から一つ選べ。解答番号は **38** に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち

- ① リベラルアーツ教育の偏狭性
- ② 功利主義と平等主義への抵抗
- ③ 英国の新しい大学のありかた
- ④ 教養教育の理念に対する反発
- ⑤ ロンドン大学に見る職業教育
- ⑥ イギリスの大学とフンボルト
- ⑦ ニューマンが擁護した学生像
- ⑧ オックスフォード批判の先鞭

問13

空欄

乙

から一つ選べ。解答番号は **39** に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち

- ① カトリック大学創設が導いた帰結
- ② 産業革命の進行に伴う反効用主義
- ③ オックスフォード大学の風土から
- ④ アーノルドの文化論に見る類似点
- ⑤ 有用性重視と貴族的高潔さの対峙
- ⑥ ニューマンの改宗と英国産業革命
- ⑦ 国家と教会からの自由という困難
- ⑧ 未来の大学が乗り越えるべき古典

問14

本文の内容に合致するものを、次の①～⑨のうちから二つ、選べ。ただし、二つとも正解しなければ点を与えない。解答の順序は問わない。解答番号は

40

41

- ① 設立当初のロンドン大学は、職業教育を含む多様な開講科目やチュータリングよりも、講義を中心とした授業や全寮制にこだわらない学生生活、試験による学位認定などを重視し、今日ではアメリカ型大学のスタイルと考えられているものの多くを実験していた。
- ② オックスフォード大学でニューマンの講義に出席したマシュー・アーノルドが一八六九年に出版した『教養と無秩序』は、レイモンド・ウィリアムズの『文化と社会』以降のカルチュラル・スタディーズの諸研究を批判的に乗り越えていった文化論の古典であった。
- ③ 明治政府のエリートたちがグラスゴー大学の実用重視の教育体制を明治日本に導入し、近代日本の工学教育の根幹を形作っていったのは、一九世紀の英国において古典重視のイングランドの大学と実用重視のスコットランドの大学の間で論争があったからである。
- ④ 現代日本の大学の大半は、ただ多くの学生たちを三、四年集めておいて、やがて送り出すような大学であり、知性の訓練が十分なされていない点でニューマンの大学理念からは遠く、文部科学省も様々なメディアも大学の理想型とは評価しないと思われる。
- ⑤ 一九世紀の英国では教養重視のイングランドの大学と実用重視のスコットランドの大学とが対峙する一方で、イングランド内部でも階級や宗教の差なく有能な若者を入学させ有用な教育を行うロンドン大学と、ケンブリッジのような名門私学とが理念的に対立していた。
- ⑥ 大学論の古典とされる「大学の理念」という書名の本を出したニューマンは、若くしてオックスフォード大学オリエル・カレッジのフェローに選ばれたエリート学生であったが、英国国家によるカトリックに対する干渉と自由主義に反対して、カトリックに改宗した。
- ⑦ ニューマンの「大学の理念」はフンボルト型の「第二世代の大学」の理念をも超えており、「リベラルな知」を理念の核とする大学は、産業革命がもたらした諸々の価値転換、有用性や効率性の規準を超える知的展望をもたらすものでなければならぬというものであった。
- ⑧ 日本の旧制高校的な教養教育の理念と、戦後に南原繁らが目指した一般教養教育やその後の労働者教育につながる理念との対立によく似た対立は、スコットランドの大学に見られる理念とロンドン大学の理念との対立にも見られるものであった。
- ⑨ ニューマンの主張によれば大学は「リベラルな」知性を育む場所であり、その使命は「学識」や「知識の習得」を退け、「哲学」と呼ばれるものを身に付けさせることにあり、オックスフォードのような教養重視の大学が知性の訓練に適しているということになる。